

今日は、三位一体主日という、わたしたちの教会の記念日です。

イエス様がこの世に来られるまで、つまり旧約聖書の時代、別の言い方をすれば、紀元前の時代、聖書の民であったユダヤ人は、神様とは、天地を創造された神様ただひとりだ、と信じていました。これを唯一神信仰という風に呼んでいます。この考えは、その後、キリスト教もイスラムも同じなのですが、イエス様が誕生されてから、ちょっと事情が変わってきました。

イエス様は、病人を癒したり、人々に語りかける中で、それまでの宗教家とは違う、人々が驚くようなことを主張されました。その代表的なものは、「わたしと父とは一つである」(ヨハネ10:30)とか、「わたしを見た者は、父を見たのだ。」(ヨハネ14:9)などです。特に、ユダヤ人の指導者にイエス様がこのような言葉を言われると、それは、自分を神だと主張していることになり、神様ではない者を神様にしてしまう、偶像崇拜であり、モーセの十戒を破る、神様を冒涇した発言として受け取られてしまいました。結局、このような発言が、イエス様を十字架に架けることにつながってゆくわけです。

また、イエス様が復活して、神様のもとへ帰られると、それにかわって、聖霊が降り、弟子たちの集団である教会を導いていった、ということで、天地を創造した神様のほかに、イエス様と聖霊が登場し、神様は、ひとりだけど、三つの位格がある、みたいなややこしいことを、教会は主張しはじめたのです。つまり三位一体のことですね。位格のことをギリシャ語では、ペルソナと言って、ちょうど、ギリシャの演劇とか、日本の能などで、ある役割を演じるために顔に付ける「お面」みたいな言葉でした。

つまり、神様には三つの顔がある、という説明をしたかったのでしょうか。おそらく、これは、ギリシャ哲学が普及しているところへ、キリスト教を伝えるための方法として、言葉の説明に苦労した結果だろうと思います。

しかし、聖書の中には、三位一体など、むずかしい言葉はありません。

ただ、イエス様が天に帰られる時、マタイによる福音書の最後、28章19節では、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」なさい。と命じておられます。これはイエス様が直接言われたのではなく、この福音書を書いた頃の、教会の信仰告白です。遅くとも1世紀の終わりには、もう、この「父と子と聖霊」という表現は、初代の教会では一般的になっていた、ということでしょう。みんなが、言葉としては、あたりまえに使っているのに、むずかしい理屈をつけて説明しなければならない、ということがあったのではないのでしょうか。

ある、神学者が言うには、この三位一体の教理というのは、わたしたちが日常普通に使っている日本語のようなものではないか、と言うのです。私たちは、生まれた時から日本語を当たり前に使っています。子どもの頃から、これに慣れていきます。しかし、これを、今まで日本語を学んだことのない、外国人に教えるためには、むずかしい文法を、順を追って教えなければなりません。漢字やひらがななどが混じった日本語の文法を教えるのは、簡単なことではありません。言葉を話すことは、やさしくても、その構造を説明するのは、難しいものです。それと同じように、当時のクリスチャンが信じていることを、口で説明しようとする、と、むずかしい神学用語が必要になってくる、というわけです。

時々、この三位一体の教理は、神秘だから、理性ではわからない、と言われてたりします。しかし、三位一体が神秘なのではありません。これは、神様のことを説明するのに人間が行った説明に過ぎません。本当の神秘というのは、むしろ、天におられる父なる全能の神様が、イエス様を通して、また聖霊を通して、わたしたちに語りかけてくださった、ということ。これこそが、神秘なのです。

さて、それで、今日は、三位一体、父と子と聖霊という教えについて、当時のクリスチャンにとって身近だったものを例にあげて、考えてみましょう。それは、「主の祈り」についてです。

この祈りには、イエス・キリストも、聖霊も出てきません。しかし、この祈りは、天におられる神様のことを「父よ」と呼びかけで始める、画期的なものでした。この「父よ」という言葉は、子供が父親に、甘えるように、親しく語りかける言葉です。もし、イエス様が、神様から遣わされた、神の子なら、「父よ」と呼ぶのは、当然のことかもしれません。ただ、マタイによる福音書では、「わたしたちの父よ」と言っているのです。これは、天の父が、イエス様の父であると同時に、この話を聞いている弟子たちにとっても、やはり「父」なんだ、ということです。以前わたしたちはイエス様と神様のような親しい関係にはなかったのですが、今、わたしたちは神様の養子にいただいた、ということなんです。

どうして、わたしたちが、イエス様と一緒に、神様のことを「父」と呼ぶことができるようになったのか、ということですが、それは、聖霊の働きによるのだ、とパウロは語っています。

ローマの信徒への手紙 8 章 14 節から 15 節

「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。」

また、イエス様がこの世に来られたのも、わたしたちが神の子となるためだ、とも書いています。

ガラテヤの信徒への手紙 4 章 4 節～7 節

「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。」

このように、三位一体の教えは、神様には「父と子と聖霊」の三つの位がある、というような数字のことではなく、聖書の初めから、わたしたち人間には、とても遠い存在だった神様が、イエス様を通して、そして聖霊の働きによって、わたしたちを、神様の子どもにくださった、という、とてもうれしい教えなんだ、ということです。

ここで、ちょっと余分な話をします。ヘブライ語で、子どもがお父さんと呼ぶ時は「アッバ」ですが、お母さんと呼ぶ時は「イマ」です。「お父さん、お母さん」は「アッバ、イマ」と言っています。

さて、話を元に戻すと、三位一体についての信仰を、わたしたちは、聖餐式や、朝の礼拝の中で、口にしていることを、皆さんは覚えておられるでしょう。

聖餐式の最後には、司祭が祝福の言葉として「父と子と聖霊なる全能の神の恵みが、常に皆さんとともにありますように」と言いますが、これは「父なる神様の恵みが、子を通して、聖霊において、皆さんとともにありますように」というのが正確な意味です。

また、宮崎の礼拝では、6年前から月1回行うようになった、朝の礼拝などで詩編を唱える時、最後に「栄光は、父と子と聖霊に」という栄光の歌を唱えますが、これも「聖霊において、子を通して、父なる神様に栄光が帰せられますように」ということです。

私が現在の「み言葉の礼拝」に問題を感じる理由のひとつは、この伝統的な、「栄光は父と子と聖霊に、初めのように、今も、世々に限りなく アーメン」という栄光の歌を唱える機会をなくしてしまっているからです。

祈祷書の869ページの詩編第119編の次に小さな字ですが「各区分ごとに栄光の歌を用いる」と書かれています。朝夕の礼拝や朝夕の祈り、昼の祈り、就寝前の祈りなどでは、当たり前のように何度も出てくる表現です。私たちに身近にこの三位一体の神様を賛美する栄光の歌を唱えるべきなのに、現在の日本聖公会の聖餐式やみ言葉の礼拝では、詩編の最後に栄光の歌は用いないことになっています。み言葉の礼拝の3ページの〔I〕詩編第95編を使う時だけ、最後についていますが、6ページの詩編のときは、「栄光の歌は用いない。」と書かれています。

理由は、詩編が旧約聖書の後に唱えられるので、まだそこではイエス様は登場していないので、歴史的流れを大切に、福音書で初めて子なる神様が登場するからだ、という説明を聞きました。

しかし私には屁理屈としか思えません。フィリピンへ行った時、聖餐式で彼らは詩編の後栄光の歌を唱えていますし、韓国でもそうしているそうです。そして、私たちの教会では聖餐式の初めに、キリエ・エレイソンを歌いますが、その代わりに、〔I〕を使えば、栄光は、父と子と聖霊に、という栄光の歌を最初に用いているのです。

まあ、不満はそれぐらいにしましょう。

本日は、三位一体主日です。そして、聖霊降臨後第1主日でもあります。これからずっと聖霊降臨後の主日が続いてゆきます。聖なる三位一体の神様を教会の名前にしている私たちの教会は、もっと親しく、この栄光の歌を詩編と一緒に唱える日常生活をしたいものです。

わたしたちが、聖霊の力によって、子であるイエス様を通して、父なる神様とともにあることの確信を持って、歩みたいものだと思います。